学生ボランティアの声

留学生と平野を歩いて

山口　琴世（文学部 3 回生）

私はずっと大阪に住んでいながら、平野には行ったことがありませんでした。事前に平野という地がどんなところかは聞いていたので、なんとなく私の住んでいる地域と似たようなものかなというイメージがありましたが、少し違いました。私の住んでいる枚方も平野と同じく、昔の町を残そうとしている運動のひとつで歴史街道というものがありますが、道がきれいに整備されていたりして何だか作られた歴史という感じがしました。平野はそれと違って本当に昔のままという感じで、私も留学生になって別の国に来たみたいでした。留学生の人達も日本とはまた別の国にいるような感じだったのではないかと思います。

私たちのグループはまず杭全神社に行きました。入り口に大きな楠があって、みんな物珍しげに写真を撮っていました。神社の中の狛犬の足に紐がぐるぐる巻きつけられていて、「何かのおまじないかな？」と思いつつも、その時には結局何か分かりませんでしたが、10 月 26 日に再び平野へ行った時に、離れて行く人をどこかに行かないように結び付けておいたり、いなくなった人を自分のもとに帰らせる、そういう意味のおまじないだというのをバスガイドさんから聞いて、なぜあんなことをしていたのかがやっと分かりました。あのような狛犬を見たことがなかったので、杭全神社の連歌所と同じくらいあの狛犬も有名になったらおもしろいのにと思いました。

次の大念仏寺に行く途中で道脇にだんじりの倉庫がありました。一人の留学生が「だんじりって何？」と尋ねてきましたが、あまり英語のできない私は「Hirano original festival」としか答えられなかったのが残念でした。

午後からは商店街、環濠が残る公園、「かたなの博物館」、お饅頭屋さんなどに行きました。「かたなの博物館」では、留学生が本物の日本刀を持たせてもらっていたのが結構重たそうでした。最後に集合場所の全興寺に戻ったときに、入り口の横に駄菓子屋さんや駒など昔のおもちゃで遊べる場所がありました。小学生ぐらいの子から大人まで遊んでいる中で、私たちも一緒に遊びました。独楽やケン玉は小さいときに遊んだことがありましたが、久しぶりにすると難しくて、留学生と一緒に苦戦しながら遊びました。



同じグループのみんなと私（左から 3 人目）

平野の町は昔の姿をそのままに、子供も大人も楽しめる場所であり、平野郷として栄えた歴史も深く、留学生も京都や奈良とは違った日本を感じられる場所だったのではないかと思いました。私自身も昔の遊びなどをしてとても楽しむことができ、また違った日本を感じることができました。

留学生と平野ウォークを体験して

原田　恒恵（法学部 4 回生）

私は今回、留学生の付き添いとして、二回にわたり関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター主催の平野での地域関連企画に参加させていただいた。私たち日本人学生には、留学生のサポートをする役割が与えられていたので、その地域に関しての知識がある方が当然望ましいのだが、私には全くといっていいほどそれがなかった。知識不足のため、頼れるスタッフになれていなかったことが少し心残りではあるが、留学生たちと一緒に平野のまちでさまざまな新しいことを学べたことは私にとっても良い経験になった。



平野に向かうバスで

第一回目は、センターによって前もって分けられたグループ（留学生、日本人学生、センタースタッフがバランスよく配置されていた）ごとに、一日かけて平野のまちを歩きながら、まち全体を肌で感じると同時に、その三週間後に開催された「平野をさぐる」と名付けられた地域連携企画に展示する写真コンテストの写真を撮影した。

第二回目の午前中は前回同様、平野地区の散策（私たち参加者はこれを平野ウォークと呼んでいたため、以下、平野ウォークと呼ぶことにする）を楽しみ、午後からは前述した地域連携企画に参加し、そこで写真コンテスト表彰式が行われた。この表彰式終了後には、入賞者以外にも参加賞として大阪を象徴するデザインのクリアファイルやしおりなどの素敵なプレゼントが渡されたので、惜しくも入賞できなかった留学生たちは喜んでいた。センターの細かい気配りに私は驚いたが、後にそれは日本らしさなのかもしれないと思った。

平野地区は、留学生たちが生活している吹田・千里山の地域とは大きく異なっており、今なお歴史的な建造物、そして古き良き地域社会、地域文化が残されている。恥ずかしい話ではあるが、正直なところ、私は今回の企画に参加するまで平野区がこのような地域を有しているとは知らなかった。もちろん、平野地区を訪れるのも初めてであった。私以外の日本人学生たちにとっても初めてだったようである。このことから、平野地区は留学生たちにとっても簡単に行ける（連れて行ってもらえる）場所ではないということが考えられるので、今回センターによってこのような機会が与えられたことは大変良かったのではないかと思う。

今回の平野ウォークに参加したのは、来日して間もない留学生がほとんどだったので*、平野を特別な地域だと思わずに、大阪の町の一部として自然に受け止めていたように思う。平野ウォークは、遠足のような感じであったので、留学生たちは楽しみながら、日本の伝統的な地域社会や地域文化に触れていた。彼らにとっては何もかもが新鮮だったようで、わくわくした様子だった。写真コンテストを開催するということで、留学生たち一人一人には使い捨てカメラが与えられ、彼らは初めて見るもの、珍しいもの、面白いもの、気に入ったものなど、さまざまなものや風景を次つぎにカメラに収めていた。私の目から見て、彼らはそれぞれ自分なりに平野ウォークを楽しんでいた。また、出会った地域の人々に温かく接していただいたことも彼らにとって良い思い出となったはずである。日本のことをもっと知りたいと願い、日頃さまざまなことに挑戦している留学生たちが、平野ウォークを通して、楽しみながら大阪、平野地区の地域文化・社会に触れることができたという点で、今回の企画は有意義であったということができるであろう。

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターにとって、留学生たちと一緒に作り上げる企画は今回が初めてだったようであるが、成功したのではないかと私は思う。留学生を招いての企画は、彼ら

の安全確認や、特別なサポート、私たち日本人学生への指導、アドバイスなど、主催者であるセンターのスタッフの方がたにとっては大変なことが多いが、可能であれば、これを機にぜひ年に一度はこのような企画をセンターで実施していただけたらと思う。

最後になったが、知識不足で、少し頼りない私をサポートしてくださり、留学生たちとの楽しい学びの時間を与えてくださった関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、この企画に協力してくださった全ての関係者、地域の皆様、そしてこんな私を頼りにしてくれ、楽しい時間を共有してくれた留学生たちにこの場をお借りして感謝の気持ちを申し上げたいと思う。

＊ 欧米の大学の始業が秋であるため、関西大学もこれらの国ぐにからの留学生の受け入れを秋に行なっており、秋学期から関西大学に留学してくる学生が多い。



全興寺の境内でＣ班のメンバーと（左端が私）